

IIP-AA 派遣報告

博士後期課程 牧野 波

【派遣期間】2011年9月30日～2012年3月22日

【派遣先】ソウル 韓国外国語大学

【派遣先指導教員】チェ・ジェ Chol 教授

【派遣成果】

派遣者は、植民地期の独立運動をテーマとした独立記念館（1987年開館）、朝鮮戦争をテーマとした戦争記念館（1994年開館）といった歴史記念施設を具体的な対象として、コメントレーションによる韓国の国民統合の様相を研究しています。今回の派遣では、主として朴正熙政権期の歴史記念事業について資料収集その他の活動を行い、その後続く全斗煥・盧泰愚政権期に行われた記念事業の構造を分析する一助となりました。

朴正熙政権期には、韓国において初めて近代的かつ体系的な形での歴史記念事業の立ち上げがなされます。それは、社会全体の近代的国民創出のプロジェクトの文化面での一環として明確な目的意識を持って行われました。また、朴正熙政権期当時に創設された文化公報部という部署が、一方でメディアの言論統制を行いながら、他方で歴史記念事業を推進し情報発信を行って、国家のプロパガンダを社会に普及していく役割を果たしていました。全斗煥政権期に設立された独立記念館にも文化公報部は関与しますが、朴正熙政権期の歴史記念事業の枠組みの延長線上に、文民政府が誕生するまでの歴史記念事業を位置づけて考えるという視角を獲得することができました。

以下、派遣期間中の活動と成果を大まかに分けて、個別に報告します。

1) 聖公会大学・曹喜昞（チョウ・ヒョン）先生のゼミ講義「社会学セミナー 東アジアの支配と抵抗」の聴講

韓国のNPO・NGO運動分野で活躍しながら、『動員された近代化』、『朴正熙の開発独裁時代 —5.16 から 10.26 まで』などの著書で朴正熙政権期の政治・社会構造についても研究をなさっている、曹喜昞先生の博士課程のゼミ講義を聴講する機会を得ました。韓国国内の政治変動の軌跡を冷戦期の世界秩序の動きと関連付けるさまざまな論文を読み進め、現在の政治状況をどう分析するのか議論する授業でした。運動と資本と政権の関係や保守派と進歩派の関係の推移など、韓国の現代史をかたちづくってきた内在的な力学の構造について理解を深めることができました。

また、曹喜昞先生が朴正熙政権への国民の同意について論じた著書である、『動員された近代化』を翻訳する機会を滞在中に頂きました（日本での出版社は未定、現在日本で翻訳研究会を継続中）。朴正熙を再評価する動きは保守派が改めて台頭してきた韓国における現在の問題でもあり、朴正熙時代の社会構造分析のひとつの試みとして、興味深く翻訳しています。今回の派遣の副次的な目的である、研究言語としての韓国語能力の涵養という側面においても、講義の聴講と合わせて意義深いものになりました。

2) 韓国・国際語文学会での発表

派遣先である韓国外語大学でお世話になった李慧真さんの紹介で、2012年3月17日に韓国・国際語文学会の定例会で「朴正熙政権期の文化政策のスケッチ ―文化公報部を中心に―」という発表をさせていただきました。

民族主義の政治的利用について論じたチョン・ジェホ論文など二次文献を渉猟する中で、文化公報部が韓国の歴史記念事業に果たした役割の重要性を認識し、韓国の歴史記念施設について博士論文で論じる背景の一部として、文化公報部の政策を概略的に検討し、論じました。

朴正熙政権期に創設された文化公報部は、李瞬臣將軍や世宗大王といった歴史的人物の記念事業をとりおこなうエージェントとなり、朴正熙政権期の国民統合を文化面から担う役割を果たします。しかし、それ以外にもプロパガンダ映画の地方巡回公演、ラジオ・テレビ放送網の全国的整備、各種プロパガンダ冊子の発行・配布を行い、また新聞社の統廃合を行うなど、広い意味でのメディア政策全体をも管掌しています。そうした文化公報部の役割全体を踏まえ、歴史記念事業まで含めて、文化公報部が朴正熙政権期唯一の「メディア」となろうとしたというテーゼに収れんする形で論じました。

参加者からは、文化公報部の政策推移と朴正熙政権期のそれぞれの局面とを内在的に結び合わせて論じる必要性や、文化公報部と政権内部の人脈的な連関を把握する必要性があることを指摘して頂きました。こののち、独立記念館の設立過程を追った論文を執筆する予定であり、文化公報部との関連を論じる際に生かすことができればと考えています。

3) その他

滞在期間中、先述した『動員された近代化』以外にも、明知大学の金翼漢先生が日本アーカイブズ学会で発表される原稿の翻訳をする機会を頂きました。またアーカイブズ学に関連して、法政大学の金慶南先生、学習院大学の安藤正人先生のご厚意で、釜山、南海沿岸の巨済島、巨文島への調査旅行に通訳として同道させて頂きました。どちらも、韓国に残る記憶・記録の問題に関わるものであり、歴史記念（施設）というやはり記憶と記録を研究対象として扱う派遣者にとって、多くを得る経験になりました。

また、2011年11月から2012年2月まで、週に三度の頻度で一般の方と日本語―韓国語でのラングウィッジ・エクスチェンジを行い、韓国語能力の向上を図る機会に恵まれました。

以上のように、今回の派遣を通じて軍事独裁政権期の文化公報部の役割についての認識を深め、分析における新たな課題を得ることができました。また、研究・生活両面での韓国語能力の向上を図る機会にも多く恵まれ、今後の研究生活に資するものが大変大きい滞在となりました。今後、今回の滞在で得た課題を念頭に置きながら、博士論文執筆に向けて研究を続けていきたいと思えます。